

知っているってどんなこと？

— 高校倫理と現象学 —

Yushi Kajio

梶尾 悠史

奈良教育大学 社会科教育講座

知っているってどんなこと？

－高校倫理と現象学－

奈良教育大学 社会科教育講座 梶尾 悠史

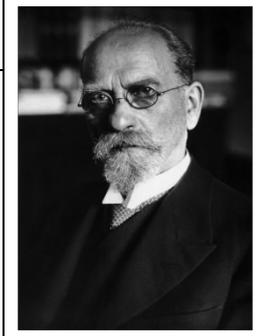
はじめまして。梶尾悠史と申します。奈良教育大学で哲学・倫理学を研究しています。私は、特に E. フッサール（1859 - 1938）という哲学者の思想に親しんできました。この人物は現象学という学問分野を打ち立てたことで有名で、間違いなく現代哲学のビッグネームの一人に数え入れられます。ところがこの人物、一般にはあまり知られていないようです。ハイデggerやサルトルなど彼の後継者たちの人気に比べると、どうしても影が薄くなりがちです。残念なことです。そこで今回、高校倫理でも紹介されるお馴染みの哲学者と関係づけながら、フッサールの思想を紹介したいと思います。フッサール現象学の知られざる魅力に触れてもらえれば（ついでに高校倫理を復習してもらえたら）うれしいです。では始めましょう。

1. 認識論という問い

授業に退屈したあなたは何となく、窓越しに校庭の方へ目をやります。すると、たとえば卒業生によって寄贈された記念樹が、自分のいる教室から見えるでしょう。が、すぐと疑問が頭をもたげてきます。（あれは本当にその記念樹なのか？）もしかすると、あなたは真偽のほどを確かめるために教室を飛び出し、その木のある場所に駆けつけるかもしれません。そして、「平成十二年度卒業生寄贈」の立札が根元に立っているのを、首尾よくその目で見届け、自分の知識の正しさを確信します。めでたし、めでたし。

👤 人に注目 フッサール (1859 - 1938)

チェコ出身で、ドイツで活躍したユダヤ系哲学者。数学の研究から出発し、あらゆる学問を基礎づけるために哲学へと転身。教え子のハイデggerがナチス支持を鮮明にすると、絶縁状を送った。主著『イデーン』『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』。(『高等学校 現代倫理』清水書院、2014年、162頁)



これで話は終わりそうです。が、さらに次のような疑問を抱かないとも限りません。(俺は目に見える樹木が本当にあると思っているけど、それは本当に本当か？ そのことを俺は本当に知っているのか？)

これは、少なくとも意味のある問いではあります。とはいえ、一体このようなことを真面目に問う人がいるのでしょうか。また、真剣に議論するだけの価値が、果たしてこんな問いにあるのでしょうか。実際には、哲学者と呼ばれる人々の多くがこの種の問いを第一級の重大問題とみなし、その解決に心血を注いできました。その結果、「認識論」と呼ばれる学問分野が誕生したのです。そして何を隠そう私の研究テーマも、おもにこの分野に深く根ざしています。

認識論の(つまり私の)研究課題を端的に表現すれば「知識の成立条件の解明」です。つまり、単なる思い込みと本物の知識の違いはどこに求められ、私たちが真の知識主体となるための条件とは何であるか、ということが、この分野において議論の争点となります。ちなみに認識論の歴史は古く、遡れば古代ギリシアのプラトン(前427 - 前347)の著作『テアイテトス』や『メノン』において既に、この問題をめぐる驚くほど緻密な議論がなされています。

2. 認識論としてのフッサール現象学

とはいえ、問題の重要性が読者のみなさんに十分伝わったとは到底思えません。そのわけは、問われている対象があまりにもトリビアルであるということにあります。たとえば「ヒッグス粒子についての知識」や「ヒトゲノムについての知識」であれば、人々の興味関心を呼び起こし得るでしょう。というのも、現在、ヒッグス粒子やヒトゲノムが人類にとって謎に満ちた存在として現れているからです。それに引き替え、私が論文でよく引く例といえば、樹木や

リンゴについての知識です。どれも日常生活において出会われる、ごくありふれた物たちです。そこに一体どんな謎が潜んでいるのでしょうか。

けれども、そのように思えるのは、日常を科学より一段劣ったものとみなす偏見に囚われているからです。注意しましょう。認識論が問題にしているのは何らかの対象ではなく、むしろ対象についての知識の側なのです。ここでは、知識一般の成立条件が研究対象となります。そして「校庭の樹木の知識」は、たとえトリビアルであっても「ヒッグス粒子の知識」と同様に立派な知識なのです。対象の違いこそあれ、それらは同じ「知識」として根底のところでつながっているのです。だとすれば、考慮すべき要素を余計に含んだ複雑な知識を持ち出すのではなく、より単純な知識をモデルにしてそこから考察を始めるのが賢明なやり方であるはずです。こうして、冒頭で紹介したようなトリビアルな知識を取り上げることの意義が、ある程度は理解されるでしょう。

では、「科学的／日常的」や「推論から得られる／知覚から得られる」など知識の質の違いを度外視してもなお残る、知識一般の謎とは何でしょうか。ここで、中世の哲学者トマス・アキナス（1225 頃 - 1274）による、伝統的な真理の定義を紹介します。それは次のようなものです。

伝統的定義：真理とは、物と知性の一致である。

あなたが「S は P である」と思っていて、かつ実際に S が P であるならば、そのときに限りあなたの思いは正しい（＝真なる）知識なのです。このような知識観は、科学の営みの中に実験という手続きの形を取って組み込まれています。「リチウムの炎色反応は赤色である」と仮説ないし予測を立て、実際に赤色の炎色反応が観察されたならば、当初の仮説は正式に知識へと格上げされます。冒頭の例も確かにこれと類似した手続きを踏んでいたはずです。この定義こそ、正しい知識が満たしていなければならない最も基本的な特徴であると考えられます。

しかしこの定義は答えというより、むしろ、さらなる問いを誘発する起爆剤として多くの哲学者に受け取られたようです。認識論の探求が本格的に始まるのは、まさにこの問いをめぐるのです。たとえば、19 世紀末から 20 世紀

初頭にかけて活躍したドイツの哲学者 E. フッサールは、次のように述べています。

「ではいったいどのようにして認識は認識された客観と認識自身との一致を確かめうるのであろうか？認識はどのようにして自己を超えて、その客観に確実に的中しうるのであろうか？」

(『現象学の理念』35頁)

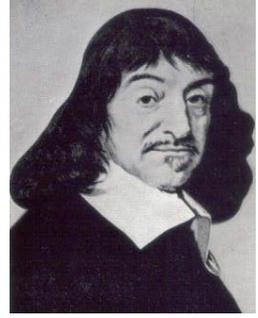
伝統的定義では、知識の正しさは物と知性の一致によって確かめられるとされます。そして検証実験としての観察、一般的に言えば、真偽を確かめるために「見る」という知覚経験によって、この一致は確かめられます。普通はそう考えられます。しかし、本当にそう考えてよいのでしょうか。他ならぬこの点をフッサールは疑っています。人間(=主観)は知覚において、物(=客観)と知性(=認識)の一致そのものを見るわけではないでしょう(これについては後で詳しく述べます)。だとすれば、何を見ているのでしょうか。

デカルトやロック、バークリ、ヒュームといった近世(17-18世紀)の哲学者たちによれば、主観が本当に知覚しているのは、樹木の幹の茶色や花の淡い桃色、あるいはそれらの形状など、要するに心の中で像を結ばれるさまざまなイメージ(=観念)です。他方、樹木それ自体など、認識との一致が問題となる客観について言えば、それらは心の外に、つまり物理空間の内に存在するのです。言うなれば、主観とは心という名の独房に生まれながらにして幽閉された囚人、それも終身刑に服する囚人のようなものです(このような考えを「独我論」と言います)。この囚人は独房の外の世界について、観念というモニター映像を通して間接的に知りうるのみです。もしかしたら、意地の悪い看守(邪悪な神)が映像の内容を差し替えていて、主観はあらぬものを見せられているのかもしれない。

しかし、観念と客観が一致しているのか、していないのか、当の主観にそのことを確かめる術はありません。それを確かめるためには、心の領域と物の領域の両方を等しく見通す能力が必要ですが、万能の神ならいざ知らず、有限の存在者である人間にこのようなことは不可能です。

👤 人に注目 デカルト (1596 - 1650)

フランスの哲学者で、合理論の祖。大学の学問に満足できず、各地を旅行して見聞を広めながら研究した。冬にドイツの暖炉部屋で見た夢から、学問を革新するヒントを得た。オランダのアムステルダムに住んで、自由な雰囲気の中で哲学を研究した。スウェーデン女王からストックホルムにまねかれるが、そこで風邪をひいて死去した。主著『方法序説』『省察』。(『現代の倫理』山川出版社、2013年、129頁)



人間が確信をもって言えるのは、自分にしかじかの観念が見えているということまでで、その観念が真理であるかどうかは分かりません。現に私たちの日常生活は、見間違いや聞き間違いの事例に満ち溢れているではありませんか。

もちろん、このような結論は受け入れがたいです。人間がもつ知識の真偽は神様次第だということになれば(デカルトによれば、神は誠実なので人間を欺いたりしないらしいですが)、真理の探求を旨とする科学の営みなど完全に立ち行かなくなってしまうでしょう。先ほど挙げた近世の哲学者たちは、まさにこのような危機感をもって「どのようにして正しい知識が成り立つのか」についての知識を、つまり知識についてのメタレベルの知識を探究しました。時代が下ってフッサールも、哲学史的に見ればこのような議論の延長線上にいます。

3. 学問の危機とフッサール現象学

3-1 心理学主義

近世の哲学者たちは、心の中に(心の目で)見られる観念を手がかりとして、そこから、心の外に存在する物について知識を導こうとします。彼らの理論を個別に検討することは、ここではしません(倫理の教科書で確認してください)。ただ一つ押さえておきたいのは、近世の認識論では心と物を二つの独立した領域とみなす「物心二元論」という考え方が前提されているということです。フッサールは先人たちと上述の問いを共有する一方、彼らと違って、物心二元論を解体する方向に問題解決の突破口を見出しています(フッサールは、この方向を示してくれた先人としてバークリを評価しています)。

フッサールが生きた時代、学問の世界では相対主義がにわかに勢いを得ていました。相対主義は、「万物の尺度は人間である」というプロタゴラス(前490

頃 - 前 420 頃) の成句に代表されることからわかるように、きわめて長い歴史をもちます。当時それが、装いも新たに心理学主義などの形を取って力を増してきたのです。いわゆる「客観的真理」とは、人間にとって真理と思われるものでしかない。こう言えば単純化しすぎかもしれませんが、実際、これに近い考えが多くの人々によって支持されました。たとえば、必然的とされる論理法則（「A は非 A でない」という矛盾律など）でさえ、人間という種が偶々従っているにすぎない心理法則というものに置きかえられるのだと主張されました。もしこれが正しければ、種の数だけ異なる論理学がありえることとなります。しかし学問の目的は自然や宇宙の真の姿を知ることであり、しかも、その知識を導き出すための基本的なツールが論理学なのです。だとすれば、以上の状況を「学問の危機」と呼ばずして何と呼ぶでしょう。

フッサールは、このような危機的状況の克服を目指して、現象学という新しい学問分野を打ち立てました。なるほど、そこで扱われる問いは、伝統的な認識論のそれ（「どのようにして正しい知識が成り立つのか」）と大きく違いません。しかし、現象学には決定的に新しい側面があります。それは長きにわたって人類を支配し続けてきた物心二元論という物の見方を、根拠のない先入観として拒絶するのです。その意味で、現象学は認識論の系譜に属しながら同時に、認識論の弱点の克服という使命も担っています。

3-2 自然主義（科学主義）

なぜフッサールにとって二元論批判が重要なのかといえば、次のような事情があるからでしょう。先に述べたように、心理学主義は相対主義という好ましくない結論を導きます。この結論は、「客観的な世界が実際にどうなっているかは分からない。でもまあ、心の中の出来事については分かっているつもりだから、取りあえずそれで満足しよう」という開き直り、ないし妥協の産物だと言えます。囚人は囚人らしく、独房という自分に与えられた生活圏内で穏やかに暮らそう、というわけです。しかし、これは、学問に取り組む者がとるべき真面目な態度ではありません。もし二元論がこのような半端な態度へ誘うとすれば、むしろ二元論をきっぱりと拒絶すべきなのです。それこそ学問に身を捧げる者の真摯な姿勢というものです。おそらくフッサールはこのように考えて、

二元論批判に向かったのです。

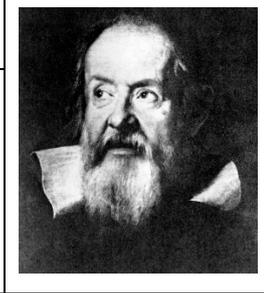
もう一度、冒頭の例に戻りましょう。あなたは教室の窓から校庭にある樹木を見ています。このとき、自分が見ているかどうかにかかわらず、その樹木はそれ自体で存在しているにちがいません。たとえ自分が見ていなくても、また、地球上の誰も見ていなくても、その樹木は一個の物質的な存在者として、見えている場所に存在しているはずで、反対に、自分の目に樹木が見えるのは、それがその場所に存在しているからです。さもないと咲き誇る花々の色合いや香り、幹の形態や手触り、そして木の葉のさざめき等々が、自分や他の誰かの五官を通して経験されることなど、決してなかったでしょう。普通、そう思われます。要するに、物の存在は経験をある意味で「超えて」いて、逆に、経験は物の存在に依存しています。これが私たちの常識です。

しかしこれは、ともするといわれなき偏見に転じる危うい常識です。偏見とはほかでもない物心二元論の世界観のことですが、この世界観の普及に一役買ったのが自然科学です。

ほんらい「存在は経験を超えている」と「存在は経験から独立である」は、まったく違ったことを述べています。このことに注意しましょう。前者は私たちの経験に根差した実感なのであり、経験を欠けばかえって意味を失ってしまうたぐいの文です。たとえば校庭の樹木を見るとき、まさにこの経験を通して、このような思いがあなた自身に湧き起ってくるのです。「存在は経験を超えている」という文は、その意味において経験に依存しています。他方、後者はその主張内容を素直に受け取れば、経験に依存しません（「経験から独立である」と言っているのですから）。さらに、この文は「存在に関する記述は、記述を行う主観の視点を排除したものであるべきだ」という規範として働き、それが客観性に重きを置く科学の営みを規定することになります。自然科学関連の本を何でもよいから手にとって見てください。そこに登場する「気体の体積は温度に比例する」というたぐいの記述からは、温度変化などを経験する「私」の人称性が、ことごとく削ぎ落とされているはずで、科学が描く世界とは、純粹な物の世界であり、かつ、心のない世界です。この「かつ」で結ばれる前後は一枚のコインの両面です。つまり科学的世界観の前提には、まぎれもなく物心二元論があるのです。

👤 人に注目 ガリレオ・ガリレイ (1564 - 1642)

イタリアの数学者・物理学者で、近代自然科学の先駆者。ピサやパドヴァの大学で教え、慣性の法則、落体の法則などを発見した。宗教裁判の後は郊外の別荘にこもって弟子を教育し、研究をまとめた。主著『天文対話』『新科学対話』。(『現代の倫理』山川出版社、2013年、125頁)



科学の万能が謳われる現代では、科学の共通語ともいえる非人称表現が、知識を語ることのできる唯一の正当な言語であると目されています。(この信念は「自然という書は数学の言語で書かれている」というガリレイの言葉に遡ることができます。) また科学語の根底にある二元論的世界観が、世界のありのままを捉えるただ一つの見方であるかのように信じられてもいます。これらの点で科学主義、フッサールの言葉で言えば「自然主義」と、心理学主義は軌を一にしています。両者の間に異なる点があるとすれば、自然主義をとる人々は、物の世界を非人称の視点から語ることのできる特権的な立場に、自分たちがいると自負していることです。(実は心理学主義をとる人々も、心を物理現象の一種と理解することで容易に自然主義者になるのですが……。) フッサールは自然主義のこうした自負を単なる誤認として切り捨て、二元論的世界像の解体＝現象学の構築に取り掛かります。

4. 物心二元論の解体

「リチウムは波長 670nm の線スペクトルを発する」という化学の記述を取り上げてみましょう。これはリチウムという物質についての記述であり、その主語は「リチウム」、述語は「波長……を発する」です。少なくとも表面上は、この記述の中に人間の姿を認めることはできません。この記述は、主観(＝一人称)という頸木から解き放たれた誰でもない誰か(＝非人称)によって書かれたものとして理解されることを、読み手に求めているのです。というのも、この要求を満たすときにのみ、記述は相対主義を免れて客観的な真理を描くことができるからです。さもないと、「私₁にはピンクに見える」「私₂には紫に見える」等々、無数の記述が乱立することになり、どれを真理とみなすかは人それぞれであるという悪しき相対主義に陥ってしまう。自然主義者によって、このように主張されます。

仮に自然主義が、思い込みに知識の座を譲る相対主義に歯止めをかけ、経験を超える真理の存在を確保しようとしているのだとすれば、この動機はまったく正当なものです。フッサールもそれに同意するはずです。しかし残念ながら、目的を達成するための進路の選択において、自然主義は大きな過ちを犯している。これがフッサールの診断です。たしかに真理の存在は確保されなければなりません。しかしそれが確保されるのは、物の世界とは別のところにおいてであるはずで、では、どこに？ この問いに対してフッサールは、経験においてであると答えます。

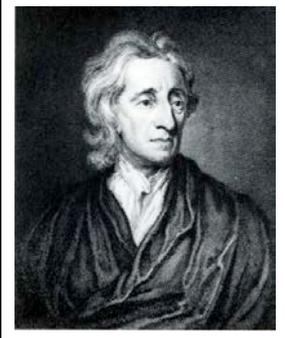
「物理学者が観察し、実験をなし、絶えず見つめ、手に取り、天秤に載せ、溶鉱炉の中に入れる、その事物、ほかのいかなる事物でもないこの事物こそが、重さ、温度、電気抵抗等々といった物理学的諸述語の主語になるのである。」（『イデー I - I』 227 頁）

自然主義者は言うかもしれません。「われわれは物理空間の中に存在する事物の真の姿を、経験に汚染されない^{なま}生の状態で記述するのだ」と。しかしこのような言明はパラドクスを含んでいます。この言葉を額面通り受け入れるならば、科学の文脈で語られる物とは科学的記述の「主語」、つまり科学的探究という経験（！）の対象なのです。対象は、それについて予測を立てたり、推論したり、観察したり、数値化したりする経験のなかで、科学的記述の主語として構成されます。感覚的記述（「赤い」「つるつるしている」「甘酸っぱい」など）の主語としてのリンゴが、それを見たり、触れたり、味わったりする主観にとってのみ存在できるのと、事情はまったく同じなのです。

もちろん科学が扱う「物」には、直に観察・操作できる日常サイズのものから、数億光年離れた天体や極小の細胞など肉眼では見えないものまで含まれます。これらの対象を観察するためには、望遠鏡や顕微鏡などの補助手段を使用せざるを得ません。しかしこの事実は、物としての天体や細胞が主観にとって経験不可能であるということや、ましてやそれらが心の外に存在するということを（もちろん心の中に存在するということも）示してなどいません。私たちは顕微鏡を通して細胞そのものを見るのです。

👤 人に注目 ロック (1632 - 1704)

イギリスの哲学者・政治学者。哲学と医学を学び、貴族の家庭教師になり、政府の要職についた。経験論の立場に立ち、また国王の専制に反対する運動に加わるが、失敗してオランダに亡命した。1688年の名誉革命の成功により帰国し、政府の要職につき、多くの著作を発表した。主著『人間知性論』『統治論』。(『現代の倫理』山川出版社、2013年、134頁)



一体どの科学者が、自分に観察されているのは対眼レンズ上の像であって細胞そのものではない、などと考えるでしょう。

科学が扱う物と五感で感じられる物は、経験の対象であるという点で同質であり、さらに実質的に同一でもあります。このことが先の引用で述べられています。ロックやその影響下にある人々は、体積、密度、質料など数値化できる諸性質（第一性質）の担い手を正式に「物質」と呼び、色や手触り、香りといった数値には表せない感覚的な諸性質（第二性質）の複合体から区別してきました。しかし、これは不合理な議論です。仮にこの主張が正しいとすれば、人は「質料 312g のリンゴ」と「甘いリンゴ」という二種類の異なるリンゴに関わっていることとなります。こんな馬鹿げた話はありません。私たちは一つの同じリンゴを計量し、そして味わうのです。この単純な事実誰が異を唱えるでしょう。

「質料○gである」「体積△cm³である」「秒速□mで移動する」等々、これらに類する数値化可能な記述のみが、世界のあり方についての真実の語りであるかのように思われがちです。しかしその思いは、科学の世界観を日常の世界観から差別化したうえで不当にも後者を独断と決めつけるという、それこそ偏見に満ちた独断なのです。上述の記述がリンゴについての真の語りであるならば、同様に、「このリンゴは懐かしい味がする」という詠嘆も真実の語りなのです。物質としてのリンゴと観念としてのリンゴを二本立てにする必要などありません。あるときには理論的と称される述語を担い、またあるときには感覚的と称される述語を担う、一つの同じものが、すなわち主語としてのリンゴが存在するだけなのです。フッサールはそう考えました。

科学的述語の主語と感覚的述語の主語は、ともに経験の対象なのであり、両

者のあいだに（存在論的な）身分の違いはまったくありません。注意しましょう。科学的探究とは極めて文化的な営為の一つなのであり、それを通じて獲得される知識もまた、生身の人間の五官を通して経験されたデータの集積として、私たち人類によって保持されていくものなのです。科学的知識もまた人間によって創造された文化財であるという事実を忘れてはなりません。科学の主役は人間なのです。

5. フッサールの真理論

5-1 経験からの出発

対象（＝主語）に対して述語を与え、そうしてできた文の内容を思うことが、その対象について知るための第一歩です。いま「第一歩」と言ったのは、いかにして思いが真なる知識になるのか、という肝心の問いがまだ残っているからです。しかし二元論が解体されることによって、紛れもなく、人間が真理に到達するための突破口は開かれました。物は人知の及ばない向こう側にあるではありません。観念ならぬ物そのものが、多様な文において主観に与えられているのです。

では、思いの正しさ、より正確には、思われる文の真という性格はどこにおいて保証されるのでしょうか。言うまでもなく物の世界や心の世界においてはではありません。フッサールによれば、知識の正しさが保証されるのは、思いが実現されるという経験においてなのです。たとえば「リチウムは赤色の炎色反応を示す」という思いは、試料をガスバーナで燃焼させ、炎色反応を観察するという経験において、初めて真理になるのです。裏を返せば、こうした経験から切り離して「リチウムは～」という文自体の真偽を問うても意味がないということなのです。

フッサールのこうした考え方は、一見、相対主義への歩み寄りを思わせます。なにしろ、個人がどのような経験をするかに応じて、同じ文が真であったり偽であったりする、というのですから。この指摘は半分当たっていますが、半分間違っています。まず、フッサール現象学の基本的なスタンスを改めてはっきりさせておきましょう。それは、「経験における対象（＝主語）の与えられ方

(＝述語)に着目し、ただそれらのみを参照して、経験される限りでの真理を把握する」というものです。したがって、「現象学が示す世界像は、経験主観からの世界の眺めにすぎない」と批判する人がいるとすれば、それこそ自然主義にどっぷり浸かりきった人の主観的な不平にすぎません。そして、現象学者としては「その通り」と応じるほかないのです。

にもかかわらず、フッサール現象学は相対主義と混同されてはなりません。後者と違って前者は、「経験される限りでの真理」が同時に客観的と呼ぶに値する「普遍性」をもちうることを、説得力のある仕方で示そうとし、それに成功するのです。最後にこのことについて簡単に論じて、本書を閉じます。

5-2 経験にとって真理とは

以前に真理の伝統的な定義を紹介しました。それによると、真理とは「物と知性の一致」です。フッサールの立場もこの伝統的な定義を踏襲しています。ただし彼が念頭に置くのは、単なる思いと実現された思いのあいだの一致です。つまり、文と文の一致なのです。まず「戸棚の中にリンゴがある」と真偽の程が定かでないまま思い、次に戸棚を開けて知覚による裏打ちを得た確信とともにそう思う。このとき時間を隔てた二つの思いの重なり合いの中で、改めて、当初思っていた「戸棚の中に～」ということが真であったということになるのです。この見解は、真理は物と知性（観念）の一致において動かし難く厳然と成り立っているとする伝統的な説明とは、根本的に異なります。経験の時間的な持続のなかで真理が生成してくる、というのがフッサールの主張なのです。

しかし、真理が経験の中にあるのだとすれば、私たちは真理に憧れを抱いたりしないはずで、誰も自分の手中にあるものを追い求めたりしません。ところが実際には、真理を希求して科学者は研究に没頭し、恋人の真意を測りかねて若者は身悶えする。経験において確かにその到来が期待されながら、しかしいまだ成就されていないという、この二面性こそ真理の本質なのです。つまり、真理を理解するためには、同時にその反面にあたる偽ないし誤謬を理解しなければなりません。確かにその通りで、先ほど真理が「生成してくる」と言いましたが、裏を返せばそれは、真だと信じられていたことが一転、偽であったと判明することがありうるということでもあります。

話を少し戻しますが、現象学は対象の「与えられ方」に注目します。このスタンスを動機付けているのは、次の考えです。どの対象にも固有の与えられ方があり、それらが、それぞれの対象の本質を規定している。だとすれば、経験への与えられ方を正確に知ることは、対象を正しく知ることにとって重要な要素であるはずだ……。このように考えていったとき、樹木やリンゴ、粒子、天体など、存在の真理が経験にとって汲み尽くしがたいもの、端的に言って「経験を超越るもの」に固有の与えられ方が問題になります。おそらくそれは、述語としての与えられ方を通して経験される、もう一段高い意味での与えられ方なのです。どういうことでしょうか。

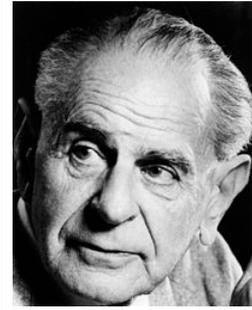
ここでフッサーが注目するのは、対象の「射映」という構造です。同じ対象が見る角度の違いに応じて、さまざまな異なる姿を現します。一枚の十円硬貨が、真上から見れば円形であり、斜めから見れば楕円形であり、さらに真横から見れば長方形である、というふうに。もちろん、形の異なる三枚の十円玉が在るわけではありません。一枚の同じ十円玉が、異なる与えられ方をもつのです。このような「同一性のもとでの多様性」が、射映という構造なのです。この射映は、さまざまな与えられ方を通して認められる、一段階高い次元での与えられ方です。あるいは「パターンのパターン」という言い方をしてもよいでしょう。「円形」というパターンや「長方形」というパターンなど複数のパターンが、「十円玉」という高次のパターンのもとに置かれるからです。

さて、少し前に「経験の中で真理が生成する」という趣旨のことを言いました。実は、いま見た射映構造が、真理の生成にとって決定的に重要なはたらきをしています。まず、この射映構造から、次の二つのことが見えてきます。①対象の与えられ方の全てを一挙に完全に規定することはできない（私たちは特定の位置から、対象の特定の側面を見ることしかできない）。それゆえ、②対象に関する私たちの知識は常に誤謬の可能性を含んでいる（たとえば、立派な屋敷だと思って回り込んでみると、ただの書き割りであったという例）。

①こそ、対象が「経験を超越している」ということの本当の意味なのです。それは、経験を時間的に積み重ねていくことしかできないという人間の有限性に由来します。この有限性は、物を直接的に知覚することができないという二元論において言われたそれではありません。

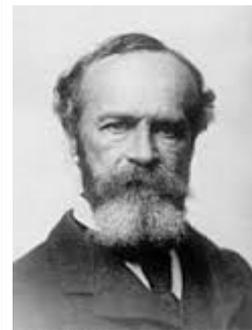
👤 人に注目 ポパー (1902 - 1994)

オーストリアの哲学者。科学的な命題とそうでない命題を区別する基準として、反証可能性を提案し、反証に開かれていることが、より真理に近づく条件であると主張する。ポパーのこの立場は批判的合理主義とよばれる。主著『科学的発見の理論』。(『高等学校 現代倫理』清水書院、2014年、169 - 170頁参照)



👤 人に注目 ジェームズ (1842 - 1910)

アメリカ合衆国の哲学者・心理学者。ニューヨークに生まれ、少年時代は画家をめざしたが、やがて大学で化学・医学・心理学を学び、ハーヴァード大学で哲学・心理学を教えた。若い学者たちのグループ「形而上学クラブ」のメンバーになり、実生活と結びついた新しい思想を探究し、プラグマティズムを普及させた。主著『プラグマティズム』『宗教経験の諸相』。(『現代の倫理』山川出版社、2013年、151頁)



いかなる対象であれ、人間はそれを直接的に見ることができます。ただし、射映構造に由来する超越（経験を超えている）という与えられ方において見るのです。人間は経験を超えるものを知覚できる。このことを示すことによって、フッサールは真に物心二元論を克服したのです。ところが、①より②が帰結してしまうのです。どういことでしょうか。

私たちは自分の目に見えるいくつかの現れを統合して、対象を認識します。けれども先ほど言ったように、たった一つの対象でも無限の現れをもつ一方、人間が実際に確かめられるのは、それらのうちのごく一部でしかありません。仮に、赤色と丸い形態の現れをもとに、「そこにリンゴがある」と思うとします。しかし、それを手にとって割ってみたら、リンゴとは似ても似つかない果肉が露わになるかもしれません。対象がもつ全ての現れを一挙に見通すことができないかぎり、人間は、その種の裏切りの危険に絶えずさらされています。言い換えれば、人間は真理のうちに安らうことが決してできないのです。この事実は、究極において対象について真なる知識を得ることなど不可能である、ということの意味するように思われます。

このことは知識を追求する人間にとって必ずしも悲観的な状況ではない、とフッサールは考えます。彼の考え方は、K. ポパーの「反証主義」という立場に近いでしょう。それによれば、ある仮説が真理であることを有限の観察によ

って検証することはできません。むしろ仮説は、反証テストにパスしている限りで真理に近いとみなされるのです。この伝でいけば、たとえ一面的な現れを根拠にして真なる知識を得ることができないとしても、何かについての経験を（裏切りにあうことなく）継続している限り、その何かについて真理に近づきつつあると言えるのです。したがって真理は、反証や誤謬を無限にクリアした経験の位相において、ちょうど地平線の彼方に見える太陽のように、普遍的理念として捉えられるのです。

このような真理は、私たちの科学的・日常的な経験にとって目標としてはたらいともいます。ここで想起すべきもう一人の哲学者は、W. ジェームズでしょう。たしかに私たちの知は不完全です。しかし、その不完全さを克服しようという意志が、たったいま見た真理という目標へと結実するのです。そしてその目標に導かれて、私たちの知的な生が動き始めるのです。ジェームズは言いました。「真理であるから有用であるとも、有用であるから真理であるとも言える」と。知への愛を本質とする人間にとって（とりわけ知への愛に人生を捧げる科学者にとって）、真理とは、生きていくためになくてはならないもの、紛れもなく生にとって有用なものなのです。

【参考文献】

【フッサールの著作】

- ・立松弘孝訳『現象学の理念』みすず書房、1965年。
- ・立松弘孝他訳『論理学研究』（全4巻）みすず書房、1968 - 1976年。
- ・渡辺二郎訳『イデーン』（全5巻）みすず書房、1979 - 2010年。
- ・細谷恒夫、木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社、1995年。

【解説書】

- ・竹田青嗣著『現象学入門』日本放送出版協会、1989年。
- ・谷徹著『これが現象学だ』講談社、2002年。
- ・斎藤慶典著『フッサール 起源への哲学』講談社、2002年。

梶尾 悠史 (Yushi Kajio)

2012年 東北大学大学院 文学研究科 博士課程修了
博士 (文学)
2011年 - 2013年 日本学術振興会 特別研究員
2013年 - 2015年 福島大学等 非常勤講師
2015年 奈良教育大学 教育学部 特任准教授



【研究テーマ】

フッサール現象学を手がかりに、知覚による認識の仕組みについて考察しています。また、分析哲学という現代哲学の流派とフッサール現象学を比較することによって、言語と知覚が私たちの経験においてどう関わり合っているのかを明らかにしようとしています。

【趣味】

城郭の模型を作るのが趣味です。石垣の石の色を一つひとつ塗り分けてリアリティを出したりするところが奥深いです。最近は仏像のペーパークラフトにも凝っています。気分は仏師です。

【これから挑戦してみたいこと】

何か体を動かす楽しみも持ちたいなあと思う今日この頃です。中学までやっていた剣道などどうかしらん、と袴姿の自分を想像したりはしています。

知っているってどんなこと？－高校倫理と現象学－

著者 かじお ゆうし
梶尾 悠史

2016年2月29日 第1版

奈良教育大学出版会

〒630-8528

奈良市高畑町

TEL: 0742 (27) 9135 FAX: 0742 (27) 9147

E-mail: g-kenkyu@nara-edu.ac.jp

URL: <http://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/>